
エリと王子様と宇宙戦争

柳戸 綾香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エリと王子様と宇宙戦争

【Nコード】

N1712B

【作者名】

柳戸 綾香

【あらすじ】

宇宙のと真ん中、燃料切れで立ち往生中のポンコツ愛機。大国の船に拾ってもらったエリは、宇宙戦争に巻き込まれることになることをまだ知らない。「お前は今日から俺の妃候補だ。」「はあ?!」ボンボン育ちの王子様とハンターなエリのSFチックなラブファンタジー。

事の始め。

ここは・・・宇宙のど真ん中。

このポンコツ宇宙船は燃料が少なくて動こうとしない。

そもそも私が悪かったんだけどね。

ええ、そうですとも。

私はこれでもハンター。

指名手配の犯罪者探しから、重要な届け物、金次第では暗殺なんかまで幅広くやってる。

今回は逃亡中の指名手配犯を追いかけてたんだけど・・・。

「何でこんなところで止まるのよ。」

犯人が乗ってたのは最新型のシップで、うちのはかなり、相当、だ
いぶ旧型。

燃料タンクの大きさに負けた。

熱くなった私が悪いんだけどね。

『エリ、燃料がないからだ。』

今は船に入っている相棒のアルフレット君と、さっきからこれを繰
り返している。

ここは第24銀河のはずれ。

燃料を補給するには中心部の星に戻らなきゃならない。

戻るには2日休まず飛び続けるか、ワープするしかないんだけど。

「アル、ワープできる自信は？」

私の問いかけにアルは一瞬の間を置いて言った。

『燃料を入れてくれればいくらでも。』

私は溜息と共に操作盤に突っ伏した。

「通りかかった船に頼み込むしかないわね。」

咻くのとほぼ同時に、視界が真っ赤に染まった。

そしてビービーと警告音が鳴り響く。

『右前方45度に船が接近中。回避しないとぶつかります。』

「回避してやって頂戴。」

『動く照明が消えるぞ。』

「……」

私は本日何度目かの大きな溜息を吐き出した。

そこに通信が入った。

《貴船に告ぐ。進路をあげよ。無視すれば撃墜する。繰り返す。進路をあげよ。無視すれば撃墜する。》

絶望的だ。

「アル、状況を説明してやって頂戴。」

私の言葉にアルは言った。

『燃料が足りなくて動けないから助けてやってくれ、でよろしいですか。』

私はガクリと肩を落とすと

「よろしくてよ。」

と答えた。

なんつう情けない。

《状況は了解した。後ろのハッチから中に……動けないんだっただな。こちらから回収に向かう。》

さっきとは違う男の人の声。

「……お願いします。」

私は通信ボタンを押してそう答えた。

前方にはかなりデカイ宇宙船が見えていた。

その側面に見えた紋章に私は目を疑った。

その紋章は、まさしく第34銀河にある宇宙最強の星、レリウスのものだった。

「何でまたこんな辺鄙など田舎に大国の船が？」

私の呟きに、アルは

『さあ』

だって。

そうよね。興味ないよね。

君にとっちやそんなことより燃料よね。

このとき、照明が消えようが逃げればよかったんだよね。
これが一つ目にして最大の誤算だった。

1..勝手に妃候補大作戦。

「すご〜い。」

レリウスの宇宙船に”捕獲”された私とアル、そしてポンコツ愛機。モニターに映し出されたのは馬鹿でかい格納庫だった。

この船なら10機は入る。いや、もっと入るかもしれない。

すごすぎて、私はポカンと口を開けたまま固まってしまった。

『おい、エリ。早く行って燃料をもらって来い。』

アルの声にハッと我に返った。

「はいはい。おとなしくしとくのよ。」

私は言うど、定員3人の狭い機内から抜け出した。

「ようこそ、我が船へ。」

いきなり声をかけられて、私は降りたその場で立ち止まった。

目の前には金髪に緑の瞳の美青年。

今きつと私の目、ハートマークになってるに違いない。

「私は第34銀河レリウス星王家第一王子のジン。君はハンターか？」

その言葉に、一瞬にして夢の世界から抜け出した。

背中に自然に回した手で銃を確認する。

「だとしたら？」

低く答える。

緊張した空気に肌がピリピリした。

ジンは目を細めて私を見ると、笑みをこぼして

「女のハンターはめずらしいな。」

と言った。

「よく言われるわ。」

私が返すと、ジンは首を傾げて言った。

「何をそんなに警戒している？」

その平和ボケした物言いに、ガクッと肩を落とした。

大国の王子ってだけあって、いいとこのボンボン丸出しだ。

ハンターはハンターである事を隠して生きている。

そのほうが仕事がいやすいのもあるし、ハンターってだけで命を狙われたりもするから。

そういうわけで、普通は人に「ハンターか？」なんて聞いたりしない。

もし本当にハンターだった時、場合によっては殺されてもおかしくないからだ。

自分の身を守るためなら殺しも厭わない。

それがハンターだから。

「ジンって言ったっけ？王子様だし、世間知らずは仕方ないかもだけど、知らない人にいきなり”ハンターか？”なんて聞かないほうが身のためよ？」

私の忠告に一瞬キョトンとしたジンはニヤッと笑って言った。

「王子と名乗った後に呼び捨てにしたやつは初めてだ。なるほど、心得ておく。名は？」

「エリ。」

答えると、ジンは不敵な笑みをこぼした。

そして、とんでもないことを言い出したのだ。

「エリ、お前は今日から俺の妃候補だ。」

「・・・はあ？！」

言われて、つひやう跪かれて、手の甲にキスされて、私はそれ以上の反論をする機会を失ってしまった。

「あの・・・これは？」

私は何やらドレスが大量にかかっている部屋に通され、いつのまにやらヒラヒラのドレスを着せられていた。

「姫様になるかも知れないお方ですので、大臣らに紹介する前に着飾るようにと殿下が。」

女官の1人がそう言って私の唇に紅をさした。

「ほお、女らしい服を着ればなかなかじゃないか。」

部屋に入ってきたジンがそう言った。

私は溜息を吐き出して呟く。

「いつの間にこんな話に・・・どうでもいいけど、ドレスの下に服着っぱなしだしさ・・・。」

ブツブツ言っていたら突然、頭上から聞き覚えのある声が降ってきた。

『こらエリ！燃料はどうしたんだ？』

「アル?!」

そう紛れもない。

ポンコツ宇宙船に置き去りにしてきた相棒のアルフレット君だ。

『何なんだこのだだっ広いのは。そっちに移せ。居心地の悪い。ぶつくさ言うアル。』

「繋いだの?」

聞くと、ジンは頷いて

「燃料のないところに置いておくのも残酷だろ。」

と悪びれもなく言い放った。

後頭部がズキズキしてきた。

お坊ちゃまってのはどうしてみんなこうなんだろうか・・・。

「接続端子ありますか?」

私の問いかけに、女官が壁からコードを引っ張り出してきた。それを受け取って銃を接続する。

「おいで、アル。」

私の声に銃が反応した。

『言われなくても入った。』

それを聞いてコードを引き抜く。

「銃使いか?」

ジンが言った。

私はドレスの中に銃を押し込むと頷いた。

「まあそんなところ。」

私が適当にごまかすのと、ドアがノックされたのはほぼ同時だった。

「大臣がそろいました。」

ドアの外からそんな声が聞こえた。

「さて、行くか。」

私は、はあと大きく溜息を吐き出すとジンの後におとなしく従う事にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1712b/>

エリと王子様と宇宙戦争

2011年1月15日02時40分発行